



東山魁夷の絵が青い理由／千住博

千住博（1958年生まれ）は、「東山魁夷の絵はなぜ青いのか」という特別寄稿を、『東山魁夷 Art Album 心の風景を巡る旅』（第三巻、講談社、2008年、116-119頁）に寄せている。

千住博は、青色を「物質的支配からのがれる色」（117頁）で、「詩情性や記憶の側に位置する色」、「全てを美の範疇に置き換える色」（*ibid.*）と捉え、「青には全てを沈静させ、飲み込み、昇華させる効果があるようです」（*ibid.*）、「『時を超えて』いつの世も、人々の心を語りうる色」（118頁）と指摘している。また、「青の下には混乱や失意、苦悩が折り重なるように込められて」（117頁）おり、「全ての想いをあわせ飲み、静かに眠る」、「だから深遠なのかもしれない」（*ibid.*）、「様々な想いを一つの秩序の中に透かし込んで抱き込んでしまう、それを可能にする唯一のフィルターが青」（117-118頁）と言及している。

レオナルド・ダ・ビンチの「全ての遠景は青に近づく」という言葉を引用し、遠景としての東山世界には、「永遠の清々しさをはらむ少年の憧憬や郷愁」（119頁）が示され、「たどりつけない遠い日の幻想的な光景」（*ibid.*）が描かれていると指摘する。（吉村耕治）

●色彩データ・ライブラリの活用-1

色彩学会永田名誉会員による、日本色彩学会の会員向けの、教材が1つ100円でダウンロードできる有料サービスである「色彩データ・ライブラリ」が、学会のホームページ上にあります。

私がこのサービスを使うきっかけになったのは、中国の芸術大学で色彩を教える事になりました時に、言葉だけでは伝わらないので、図面や資料が必須になってきました。

以前は、書店で色彩の専門書を購入したりして、引用文献として記載してオリジナルテキストを作ったりしてきました。

しかし、より専門的な事を教えようとしても良いテキストが書店にはなかなか無いのが現状です。しかし、色彩データ・ライブラリには、色彩の専門的な図面、解説が、宝の山のようにあり、タイトルの閲覧は無料です。

それをどのように活用するかは、学会員次第かと思えます。宝の山があっても、その宝をどのように使ったらわからないという人も多くいらっしゃると思うので、私は、自分が役にたった事をアウトプットして、さらに色彩学会員がここに所属して良かったと思える事を、このメルマガで伝えられたらと思います。（続く）（田森恭子）

●大辞泉ひろいよみ 41 一か

描き友禅：手がきで模様を染め出す友禅染め。下絵の線に沿って糊を置き、その輪郭の中に筆や刷毛で色を塗って染める。

画具：絵をかくための用具。

画工：絵をかくのを職業とする人。絵かき。画家。

画稿：絵の下がき。また、印刷するための絵の原稿。

画材：絵になる材料、絵の題材。絵をかくときに使う材料。絵の具や筆・画布など。

重ね・襲：かさね。重ねること。また、重ねたもの。衣服を重ねて着ること。また、その衣服。重ね着。（襲）平安時代、袍の下に重ねて着た衣服。下襲。襲の色目。

重ね袷：かさねうちぎ。平安時代以降、公家の女子が日常着として一重の上に袷を数枚重ねて着ること。重ねの袷。五つ衣。

襲の色目：平安時代以降公家社会に行われた衣服の表地と裏地、また衣服を重ね着たときの色の取り合わせの種目。男子では直衣・狩衣・下襲などの、女子では唐衣・袷・ほそながなどの表地と裏地や、五つ衣・単などの重なるの、色の配合。男女とも季節や年齢などで着用する色が決まっていた。

*大辞泉：小学館発行国語辞典

（永田泰弘）